

研究

大学人のための大学論

—「国立大学法人」の法則—

「3次募集」異論
(「破格」論)

北海道教育大学教授
宮下英明 著

「国立大学法人」の法則

「3次募集」異論 ——「破格」論

本書について

本書は、

<http://justice.iwa.hokkyodai.ac.jp/>

のサイトで2009年2月4日～14日の間に書いたシリーズ

『大学院3次募集——「破格」論』

をPDF文書の形に改めたものです。

文中の青色文字列は、ウェブページへのリンクであることを示しています。

「改革」と「生き残り」がペアになると、「前向き」と「形(なり)振り構わず」が同じになる。

「やってみなけりゃわからない(やる心意気が大事)」「やりながら考える」を言うことが、インテリジェンスの現れだと思われる。

「これをやったら先がどうなるか？」を思考停止することに慣れる。
この思考停止に慣れると、「これをやったら先がどうなるか？」が端から無くなる。

「〇〇の実現のために□□をやろう！」と言われたら、「〇〇の実現のために□□をやろう！」で返す。

「〇〇の実現のために□□をやろう！」に対し「〇〇とは何か？□□とは何か？」を起動する思考回路が、機能しなくなっている。

これが、「思考停止に慣れる」ということである。

いま、「定員割れにしないために3次募集をやろう！」がトップダウンされてきた。「定員割れにしないために3次募集をやろう！」を返しますか？

目次

0. 導入	1
1.0 はじめに	2
1.1 全体の要旨	4
1. 「3次募集」の発生構造	11
1.0 要旨	12
1.1 「定員割れ」危機感の形成	13
1.1.0 要旨	14
1.1.1 「大学院定員割れ」の実際	15
1.1.2 定員割れと交付金の関係	18
1.1.3 危機感に<破格>でリアクション	23
1.1.4 <破格>発生の構造	24
1.2 管理者の成長に必要な時間	26
1.2.0 要旨	27
1.2.1 3次募集は<破格>行動	29
1.2.2 「3次募集」バブル	30
2. 「大学院定員割れ」はどんな問題なのか？	33
2.0 要旨	34
2.1 大学院定員割れの<理>の理解	38
2.1.0 要旨	39
2.1.1 「大学院定員割れ」の問題構造	42
2.1.2 受験生減少は、<惰性まかせ>の現象	45
2.1.3 本質的な取り組みと回復には、時間がかかる	47
2.1.4 定員割れのとき、それは時代の流れ	48
2.2 システムの保守・管理	51
2.2.0 要旨	52
2.2.1 この先の時間を展望	53
2.2.2 充実期間	54

2.2.3 「規模縮小」	55
2.2.4 大事を壊さない・絶やさない	56
3. 「3次募集」(<破格>)は成り立たない	59
3.0 要旨	60
3.1 「3次募集」(<破格>)にひとは集まらない	62
3.1.0 要旨	63
3.1.1 複雑が見えないので、破格をやる	64
3.1.2 「時代の波 / 流れ」の理解	65
3.1.3 波・周期運動	66
3.1.4 「抵抗・順応」の考え方	67
3.1.5 3次募集にひとは集まらない	69
3.2 「3次募集」(<破格>)は大学破壊	71
3.2.0 要旨	72
3.2.1 自ら大学院を貶める	75
3.2.2 大学が<破格>常習組織に(モラル・ハザード)	77
3.2.3 集団行動主義(知的退行)	79
4. 「3次募集」の組織心理・知力	81
4.0 要旨	82
4.1 3次募集を納得 / 説得することば	83
4.1.0 要旨	84
4.1.1 「交付金を返納しなければならない」	85
4.1.2 「定員未充足なのだから、やむをえない」	86
4.1.3 「定員割れの大学院は、潰しに遭う」	87
4.2 「3次募集」を考え出す知力の要素	89
4.2.0 要旨	90
4.2.1 <複雑系>の視点の欠如	92
4.2.2 <時間>の視点の欠如	93
4.2.3 <歴史>の視点の欠如	94

4.2.4	<国立>の視点の欠如	96
4.2.5	実効性については、思考停止	97
4.2.6	横並び志向	98
4.3	<破格>行動を支える組織の力学	99
4.3.0	要旨	100
4.3.1	稚拙な物言いが「意見・議論」の意味に	102
4.3.2	異論をつくる手間より、従う手間を択ぶ	103
4.3.3	「卑怯者にされたくない」の心理	104
5	おわりに	106

0. 導入

0.1 はじめに

0.2 全体の要旨

本文イラスト，ページレイアウト，表紙デザイン：著者

0.1 はじめに

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

「〇〇を実現するために□□をする。」

このつもりで始めた行動は、「〇〇を実現するために□□をする」とはズれてくる。

「〇〇」は、近くで見る・遠くで見る・別の角度から見るをやる毎に、意味を変えてくる。「□□」も同様である。

「集客を実現するために格安セールをする。」

客は、特価商品だけを買って帰る。つぎの日からは前と同じ。その店は、ひとから「格安セールのときに行く店」と位置づけられてしまう。

あるいは、

店を開いた途端、客が殺到し将棋倒しとなる大惨事。セールは直ちに中止。周囲は、集まった客がごった返して、交通渋滞。

こうになってしまうのは、「集客」「格安セール」を自分の閉じた空間で考えているため。

「□□」が<破格>であるとき、ズレは想定外のものになる。

「定員割れ回避を実現するために3次募集をする。」

このつもりで始めた行動は、「定員割れ回避を実現するために3次募集をする」とはズれてくる。

「定員割れ回避」は、近くで見る・遠くで見る・別の角度から見るをやる毎に、意味を変えてくる。「3次募集」も同様である。

さらに、3次募集は<破格>であり、このためズレも<想定外>レベル

になる。

本論者は、「集客を実現するために格安セールをする」の想定外を考えるように、「定員割れ回避を実現するために3次募集をする」の想定外を考えようとするものである。

0.2 全体の要旨

作成：2009-02-04 更新：2009-02-04

ものごとには、時代の流れというものがある。

大学院の定員割れは、偶然的でなければ、時代の流れである。

すなわち、大学院に入ろうとする者は増えたり、減ったりする。

ずっと増え続ける、ずっと横ばいが続く、ずっと減り続ける、というのはない。

増えるのが良いことで減るのが悪いこと、というのも成り立たない。

大学は、「大学院の定員割れ」の状況にリアクションする。

どのようにリアクションするかで、その大学のインテリジェンスの程度が知られてくる。

かりそめの「前年並み / 従来並み」をつくらうとし、そのために大学のシステムやモラルを損なおうとする——これが、インテリジェンスの最低の形である。

このインテリジェンスの形を、「本末転倒」と謂う。

しかしここに、「前年並み / 従来並み」を作為することにファースト・プライオリティをおく者がいる。「前年並み / 従来並み」をつくらないと立場上絶対に拙い、と思うタイプの人間である。

彼らが、大学を本末転倒に導く。

彼らは、自分がやろうとする「前年並み / 従来並み」の作為を、「大学のためである」というふう合理化している。

そこで、彼らに大学の本末転倒をさせないためには、「大学のためである」の論拠を退けるという行動を他の者が起こさねばならない。

ただし、彼らは、「大学のためである」の合理化を理論として示すことはしない。

理論として成り立たないことを、漠然とではあっても、感じている。「前年並み / 従来並み」の作為が「目先のしのぎ」であることも、自覚している。

ただ、「これをしないわけにはいかない」のアタマになっている。

このアタマの分析をやろうとすれば、それは「人間の心理・感情」の話になる——「論理」の話とはならない。

確認：彼らは「大学のためである」の合理化を理論として示すことをしない。

ここから、つぎの問題が立てられてくる：

「提案を行うときは、これを正当化する理論を付して行うこと」
の不実行が組織の中で許されるのは、どうしてか？

実際、「提案を行うときは、これを正当化する理論を付して行うこと」は、組織のモラルでなければならないものである。

国立大学の「法人化」では、「学長の強力なリーダーシップ」のアイデアが信じられ、トップ・ダウンの手法を受け容れる、ということが起こった。一般に、トップ・ダウンに慣らされていく中で、組織は

「考えるのはトップで、下はトップの指示に従えばよい」

の行動傾向をもつようになる。国立大学もこのようになる。

そしてこのときには、トップ・ダウンも雑なものになる。

すなわち、ただ指示を出すという形になる。

「指示が抛って立つところの理論」という考えを、上の者も下の者もできなくなる。「意見・考え」「議論」ということばは残るが、それは稚拙で言葉足らずの物言いを交わすことの意味になる。

「前年並み / 従来並み」の作為は、このような組織状況の中で、何にも妨害されずに進行する。

「大学院の定員割れ」の状況へのリアクションの場合、どのようなものが「前年並み / 従来並み」の作為ということになるか？——指導学生を勧誘する、いろいろな方面に働きかける、定員に達するまで何度も募集する。入試成績優秀者の報奨、授業料減額、無試験入学。大学院の名称をキャッチーなものに変更、定員割れが目立たない形にコース再編、等々。

本論考は、このうち「定員に達するまで何度も募集する」を取り上げる。

大学院の入学試験は、昔は年1回で、前期と後期の合間に行われた。

ところが、「大学院の定員割れ」が生じるようになった。

そこで、入学試験を年2回行うようになった。

2回目のものは、「2次募集」と呼ばれ、後期の授業が終わった後に行われる。

この「年2回」で定員が埋まらないとき、「前年並みを実現しないわけ

にはいかない」のアタマになっている者は、「さらにもう1回」の破格行動に進もうとする。これの実施は、時期的に3月になる。

「さらにもう1回」に一旦手を出してしまうと、以降「年3回」がベースになる。

「年3回」は、「大学院の定員割れ」に対して効果がない。

そこでつぎの年度には、破格の度をさらに増した新しい破格を考え出さねばならなくなる。

しかし、程度問題として、「3次募集」のつぎに「4次募集」をもってくることはできない。「いつでも受験できる」があり得る形か？しかしこれは無理。

といったぐあいに、＜破格＞のネタはすぐに尽きる。

破格のネタはすぐに尽きるが、やってしまった破格は大学に制度として残る。

「破格」をやる大学は、「破格」をやることで自分をひどく壊す。——「破格」は報いとなって自分に返ってくる、自分の首を絞めることにしかない、自分の身を滅ぼす。

本当にクリティカルな破壊は、目に見えない。この場合もそうである。

「大学院3次募集」という「破格」による大学破壊の内容は、主につぎの2つである：

- ・大学院が貶められるものになる
- ・大学が＜破格＞常習組織になる（モラル・ハザード）

ここで「大学院が貶められるものになる」とは、大学院が「入学定員を

保つことを自己目的化し、形(なり)振り構わずをやるどころ」になったことを、人が気(け)取るようになるということ。

「前年並み / 従来並み」の作為は、「破格」を大学の制度にする。併せて、大学の<大事>を壊していく。これが、「前年並み / 従来並み」の作為の<トレードオフ>というものである。

では、「大学院の定員割れ」の状況には、どのような行動を択べばよいか？

「定員割れ」の状況を、きちんと分析する。

それが本質的・構造的なものであれば、したがって時代の流れであれば、時代の流れの中で身丈にあった経営をする。

(募集回数を増やすというのは、やることが逆である。)

大学院入学者が減少する時代の後には、増加する時代がくる。その時代を展望して、「大事なものを壊さない・絶やさない」ということを努めてやっていく。

(「破格」をやるというのは、行うべきこととして逆である。)

1. 「3次募集」の発生構造

1.0 要旨

1.1 「定員割れ」危機感の形成

1.2 3次募集：＜破格＞行動

1.0 要旨

作成：2009-02-13 更新：2009-02-13

「3次募集」は、つぎのようにトップダウンされてくる——これ以上でも以下でもない：

「大学院が定員割れだ、よって3次募集だ。」

降ろされてきた方は、これを意味あることばとして受け取ることができない。考えるための内容を欠いているからだ。

「大学院が定員割れだ」は、どんな事実認識をいっているのか？

「よって」は、どんな論理計算をやっているのか？

そこで、われわれが代わって、つぎのことを明らかにしなければならなくなる：

「大学院定員割れ」は、実際どんな事実であるのか？

この事実に「3次募集」で応えるとは、どういうことか？

1.1 「定員割れ」危機感の形成

1.1.0 要旨

1.1.1 「大学院定員割れ」の実際

1.1.2 定員割れと交付金の関係

1.1.3 危機感に＜破格＞でリアクション

1.1.4 ＜破格＞発生の構造

1.1.0 要旨

作成：2009-02-13 更新：2009-02-13

定員割れに対しある行動を起こすことに決め、そして実際に行ったら、それは既成事実になり、制度になる。定員割れの認識やとった行動が間違いのときは、間違った制度をつくることになる。

そこでひとは、「定員割れ」の事実認識に慎重になり、提案されてくる行動の内容チェックに慎重になる。——本来なら。

大学執行部にとって、「定員割れ」は年度ごとの問題であり、数値の関係式である。

一方、ひとつの年度の「定員割れ」には、前後の流れ（運動）がある。意味が違ってても数値の関係式にしたら同じということがある。また、考慮する領域を拡げれば「定員割れ」の意味が失われてくる、ということもあり得る。

大学執行部は、「交付金の定員割れ相当分を国庫に返納」という文脈で、「定員割れ」を関心事にする。この文脈にのらないものは、捨象される。この捨象は、大学執行部の「定員割れ」対策の考え方にはね返ってくる。すなわち、現前の問題も対応方法も結果も単純に考えてしまう。——実際、＜破格＞が彼らの択ぶ手法になる。

1.1.1 「大学院定員割れ」の実際

作成：2009-02-13 更新：2009-02-13

「法人化」の国立大学は、いま大学院の3次募集に動き出している。大学院の定員割れ問題への対応というのが、3次募集の位置づけである。3次募集は、大学にとって＜破格＞行動である。＜破格＞までもち出して対応しようとしている「定員割れ」問題とは、実際のところどんなものなのか？

まずはこのところを押さえておく必要がある。

ここ数年の国立の大学院入学者数の推移を見てみよう。教育分野の修士課程では、つぎのようになっている：

年度	入学志願者	入学者
2002	8078	4606
2003	7682	4521
2004	7861	4547
2005	7887	4719
2006	8074	4705
2007	8071	4652
2008	7495	4172

数値は、文科省『学校基本調査報告書（高等教育機関 編）』『大学院専攻分野別入学状況』の＜修士課程・教育・国立・[入学志願者 - 入学者]>から

この表が示すことは、つぎの2つである：

1. 2008年度に、急な落ち込みが起きている。
2. それまでは、ほぼ横ばいの状態。

「定員割れ」は、漸減傾向の結果として現れているのではない。

問題は、2008年度の落ち込みの意味である。

この落ち込みが構造的なものなら、この数字が以降も続く（漸減傾向に進む）と見ることになる。

2008年度の落ち込みの意味を特定するためには、いまは材料が決定的に不足している。2009年度の数值、およびそれ以降をしばらくみていく必要がある。

いまできることは、「この間何か変わっていることは？」を考え、そしてこれを視点にして問題解釈のフレームがつくれそうかどうかを考えるということである。

「この間何か変わっていることは？」を考えてみると、つぎのものが挙げられてくる：

1. 教職大学院
2. 大学院再編の動き

教職大学院は、2008（平成20）年度からの開設であり、2008年度入学状況はつぎのようになっている：

年度	入学志願者	入学者
2008	695	522

数值は、文科省「平成20年度教職大学院入学者選抜実施状況の概要」の〈国立（15大学）〉から

上の2つの表の2008年度の数值を足せば、例年並みを少し超える数值になる。

教職大学院の数值は、初年度ということで、各大学が相当努力してつくり上げたものである。これを勘案すれば、例年並みの数值になる。

では、これまでの大学院入学実績が従来型大学院と教職大学院の入学実績に分かれ、今後この形で安定する——となるのか？

問題はそんなに単純ではない。

「二兎を追う者は一兎をも得ず」のモーメントを計算しなければならない。

各大学の問題としては、地域性も要素として絡んでくる。

1.1.2 定員割れと交付金の関係

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

大学院の「定員割れ」と「3次募集」の間をつなぐものは、大学に交付される「運営費交付金」である。すなわち、大学執行部が「3次募集」をトップダウンするのは、つぎの思考回路による：

定員割れ

→ 運営費交付金の相当部分を返納

(中期目標・計画の相当部分の「失敗」)

→ こうならないために3次募集

返納のルールは、つぎのようになっている(文科省「[定員超過・定員割れに関する取扱いの概要](#)」から引用)：

収容定員充足率が一定率を下回った場合、運営費交付金の積算のうち学生の受入に要する経費として措置している額のうち未充足分に相当する額を、運営費交付金債務のまま翌事業年度に繰り越し、中期目標終了時に国庫納付。

年度	学生収容定員に対する在籍者数の割合
平成16～18年度	85%
平成19～21年度	90%

国庫納付額 = (学生収容定員 - 在籍者数)

× 学生一人当たり教育費単価

学生収容定員：中期計画の別表に掲げられた収容定員

在籍者数：学校基本調査(学生教職員等状況票：5月1日現在)
による学生数

学生一人当たり教育費単価：

実収容定員が一人増加した際の所要額とし、教育研究組織係数(運営費交付金の算定に用いる係数)に基づき算出する。

参考：[文科省「国立大学法人運営費交付金算定ルールの概要」](#)

基本的考え方

- 国立大学法人が、平成16年度の運営費交付金額を基礎として、平成17年度以降も、中期目標・中期計画期間を通じ、見通しをもって着実に教育研究を展開し得るよう、必要な運営費交付金を確保できるものとする。
- 自主性・自律性の向上という法人化の趣旨に沿い、国立大学の教育研究の特性に配慮するとともに、教育研究の活性化につながる内容とする。

算定ルール骨子

- 前年度における運営費交付金算定上の収入・支出予算を基準とし、諸係数等により平成17年度以降の運営費交付金を算出。
- 各大学の個性に応じた教育研究の取り組みを幅広く支援することなど、教育研究の活性化を図る観点から、運営費交付

金を増額する「特別教育研究経費」の枠組みを設定。

- 効率化係数は1%としつつ、教育研究の基幹的な部分（設置基準に基づく専任教員数及び標準法に基づく附属学校教員数に必要な給与費相当額）を対象から除外。

I 学部教育等標準運営費交付金

学部教育等の教育研究費等について、学生数等の客観的な指標に基づく各大学に共通の方式により算出

[(一般管理費 + 学部・大学院教育研究費 + 附属学校教育研究 + 教育等施設基盤経費) - 収入 (入学料収入 + 授業料収入)]

- ・ 一般管理費 $\times \alpha$
- ・ 学部・大学院教育研究経費 $\times \underline{\alpha}^* \times \beta \times r$
- ・ 附属学校教育研究費 $\times \underline{\alpha}^* \times \beta \times r$
- ・ 教育等施設基盤経費 $\times \alpha$

(収入)

- ・ 入学料収入 (毎年度入学定員 \times 標準額)
- ・ 授業料収入 (毎年度収容定員 \times 標準額)

* 設置基準に基づく専任教員数及び標準法に基づく附属学校教員数に必要な給与費相当額を効率化係数の対象から控除

II 特定運営費交付金

各大学における教育研究活動の実態に応じ必要な所要額を算出

[(学部・大学院教育研究費 + 附属学校教育研究費 + 教育研究

診療経費 + 附置研究所経費 + 附属施設等経費) - その他収入 + 特別教育研究経費 + 特殊要因経費]

- ・ 学部・大学院教育研究費 $\times \alpha \times \beta \times r$
- ・ 附属学校教育研究費 $\times \alpha \times \beta \times r$
- ・ 教育研究診療経費 $\times \alpha \times \beta$
- ・ 附置研究所経費 $\times \alpha \times \beta$
- ・ 附属施設等経費 $\times \alpha \times \beta$
- ・ 特別教育研究経費 (教育研究施設の新設、教育研究事業費、教育研究設備費等に対し当該年度において措置)
- ・ 特殊要因経費

(収入)

- ・ その他収入 (検定料収入、雑収入等)

III 附属病院運営費交付金

附属病院の一般診療経費及び債務償還金の合計が病院収入と収支相応していない場合に一定の条件で交付

[(一般診療経費 + 債務償還経費 + 特殊要因経費) - (附属病院収入)]

- ・ 一般診療経費
- ・ 債務償還経費
- ・ 特殊要因経費

(収入)

- ・ 附属病院収入 (前年度病院収入 + 16年度病院収入 $\times \lambda$)

* 予定された病院収入を上回る増収分は当該法人で使用

[その他、受託事業・寄付金収入等の外部資金は交付金算定に影響させない。]

【諸係数】

α ：効率化係数。△1%とする。(設置基準に基づく専任教員数に必要な給与費相当額等を対象から控除)

β ：教育研究政策係数。物価動向等の社会情勢等及び教育研究上の必要性を総合的に勘案して必要に応じ運用するための係数。各事業年度の予算編成過程において具体的な数値を決定

γ ：教育研究組織係数。学部・大学院等の組織整備に対応するための係数。各事業年度の予算編成過程において具体的な数値を決定。

λ ：経営改善係数。2%とする。16年度病院収入に係数をかけた額の増収を見積もる。

1.1.3 危機感に〈破格〉でリアクション

作成：2009-02-08 更新：2009-02-13

大学院受験者数の減少が本質的・構造的なものであれば、したがって既にく時代の流れ〉になってしまっているときには、「前年並み/従来並み」の実現は無意味・無理である。

しかし、「前年並み/従来並み」実現の策を打ち出し実施に移すことを自分の役回りにしてしまった者がいる。「法人化」の国立大学の執行部である。彼らは、〈破格〉に手を出す。(§1.1.4 〈破格〉発生の構造)

これまでに出てきた〈破格〉には、

入学試験成績優秀者報奨(授業料免除)

授業料減額

無試験入学

大学院の名称をキャッチーなものに変更

定員割れが目立たない形にコース再編

といったものがある。(§3.2.2 大学が〈破格〉常習組織に)

そしてこの度は、3次募集が出てきた。

しかもこれらの〈破格〉は、〈危機の思惑〉先行の体(てい)でやられているふうもある。つまり、「大学院受験者数の減少」を幻想にしている。「改革」の時代には、「危機感をもつ」が唱えられる。「危機」の内容の方は、思考停止される。(ひとは、複雑なものを思考できない。思考できないので、思考停止する。)そして、「危機感に導かれた良い行動」として、不合理な行動に進んでしまう。特に、〈破格〉をやってしまう。

1.1.4 <破格>発生の構造

作成：2009-02-08 更新：2009-02-08

破格は成り立たない。

成り立たないことを見て取るのも、さほど難しくはない。

しかし、破格は現実には発生する。

なぜか？

破格は、勝算があって行われるのではない。<何かをやっている形>を無理矢理つくらねばならない者がいて、その者が<何かをやっている形>を無理矢理つくる。無理矢理つくるから、それは破格になる。

では、<何かをやっている形>を無理矢理つくらねばならない者は、どうして存在するようになるのか？

評価システムが、この存在をつくる。

評価システムは、やっているポーズを評価する。

やっていることの意味・実質的内容は、評価しない。意味・実質的内容の評価でないのは、意味・実質的内容を評価する能力 / キャパシティーをもたないからだ。

やっているポーズの方は、どうして評価できるのか？

<やっている・やっていない>の二値になるからだ。

国立大学の「法人化」で、大学執行部は、「大学評価」の点数が低くならないよう振る舞うことを仕事とする者になった。

「法人化」は、もともと筋の悪い——よりはっきり言えば、見当違いの

——プロジェクトである。見当違いのものが「大学評価」の項目になり、この項目を埋める行動があったか・なかったかで、大学は評価される。大学執行部は、その項目を埋める行動を作為する。

作為しなければならないから、作為する。

行動の意味や勝算は、二の次三の次になる。

こうして、国立大学は自分自身をおかしくしていく。

1.2 3次募集：＜破格＞行動

1.2.0 要旨

1.2.1 3次募集は＜破格＞行動

1.2.2 「3次募集」バブル

1.2.0 要旨

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

大学院の入学試験は、昔は年1回で、前期と後期の合間に行われた。

国立の教員養成系大学・学部は、昭和63年の免許法改正を契機に、平成8年度までにすべてが修士課程を設置した。

この大学院も、「入学試験は年1回」の形でスタートする。

ところが、定員がなかなか埋まらない状態がこの後続く。

そこで、入学試験を年2回行うようになった。

2回目のものは、「2次募集」と呼ばれ、後期の授業が終わった後に行われる。

この「年2回」で定員が埋まらないとき、「前年並み/従来並みを実現しないわけにはいかない」のアタマになっている者は、「さらにもう1回」の破格行動に進もうとする。これの実施は、時期的に3月になる。

3次募集は、破格行動である。

人は、自組織が窮地に陥っていると感じる時、救出行動に進まねばならないと考える。そして、「窮地」の含意として、この救出行動は破格行動——「形(なり)振り構わず」——になる。

人は、破格行動を使命感で行う。

組織の中では、この破格行動が「正しい行動」になる。

しかし、一般に破格行動は成り立たない。

実際、3次募集にひとは集まらない。そして、3次募集の実施は大学破壊になる。——よって、3次募集やってはならない。(§3「3次募集」(＜破格＞)は成り立たない)

1.2.1 3次募集は＜破格＞行動

作成：2009-02-08 更新：2009-02-08

「大学院定員割れ」の対策を＜破格＞行動で発想する大学は、この度は「3次募集」という＜破格＞に手を出してきた。

3次募集の「破格」の意味は、つぎの2つである：

1. 入学試験措置の回数において破格
2. 入学者の捉え方において破格

(時期的に、「就職浪人の回収」が3次募集の位置づけになる。)

そしてこの2つの破格が示すのは、「定員が埋まるまで稼働し続ける装置」が大学院入試の意味になったということである。

大学は、この破格行動で横並びすることに向かって、一斉に走り出す。また、さらなる破格のチキンレースに、自分を嵌めていく。

1.2.2 「3次募集」バブル

作成：2009-02-06 更新：2009-02-06

「法人化」の国立大学は、「バスに乗り遅れるな」（横並び）をいろいろな形でやってきた。

「みんながこのバスに乗ろうとしている」

「このバスに乗り遅れたら、負け組になる」

「乗っておけば、＜みんなと一緒に＞の形がつくられるので、無難」

そして今度は、「修士課程の3次募集」でそれをやりそうな気配がある。

「バスに乗り遅れるな」心理の先行で起こるのが、「バブル」である。

「3次募集」は、これを阻むものが特に起こらねば、バブルに進む。

大学院入試は、もともと年に1回であった。

定員が埋まらない状態が続くようになってから、年2回になった。

そしてこの度、「年3回」が出てきた。

これは「破格」である。

この破格は、不況のデパートが破格福袋をやり出すのと、同型である。

破格福袋に状況を変える力はないし、将来性もない。

そして、破格福袋のつぎは、破格度をさらに増した何かを作為しなければならなくなる。

破格は、自分の身をもち崩すだけである。

しかし、「バスに乗り遅れるな」心理状態に嵌ってしまった者は、もの

ごとの理を考えることができない。

「法人化」の国立大学は、こうなっている者たちをトップに頂く格好になっている。よって、事態は深刻である。

2. 「大学院定員割れ」は どんな問題なのか？

2.0 要旨

2.1 大学院定員割れの＜理＞の理解

2.2 ソリューション：状況への順応

2.0 要旨

作成：2009-02-09 更新：2009-02-09

オーソドックスでこれまでやってきた企業は、市場原理主義の時代をどんなふうにやっていくか？

企業Aは、ある外部者を、その者のMBA ばりの企業経営の腕を見込んで、経営トップに招いた。彼は、企業の業務内容を、「時流に合わない」「これでは今後生き残れない」と見る。そこで、「改革」をやる。あなたはこれを「いい話だ」と思う。

そこで、わかりやすく具体的な例で考えてみる。

「企業」を、落語協会としよう。

理事は、「改革」をどんどん打ち出してくる：

古典落語とか寄席とかでは、いまの時代はダメだ。

テレビにもっと露出し、インターネットも活用しなければならない。

落語家は外回りの営業をして、客の掘り起こしに努めること。つぎの世代の客おこしとして、小学校や児童館への出向も積極的に考えること。

空席をもったいないものと考え、会員制を導入し、会員特別割引によってこの空席が埋まるようにする。

チケットの特別割引をする。クーポン券を導入する。

扇子・手拭・座布団だとかのアイテムも旧いし、出で立ちも旧い。

これを改める。

照明を使ったショーアップもやる。

ここまでくると、あなたも「あまりいい話じゃないな」と思ってくる。——「これは、本業壊しだな。本業壊したんじゃ、本も子もないだろう。」

つぎに、「企業」を、いま定員割れの状況にある大学院にしてみる。

このときは、あなたも迷ってくる。

実際、いまの「法人化」の国立大学では、「改革」に乗ってしまう方が多数派になる。

大学人の一人ひとりが「大学院」をどんなものとして考えているかが、ここで問われていることになる。

「改革」は、オーソドックス壊しである。

「改革」のロジックは、「死んでは本も子もないから、オーソドックスを変える」である。

そこで、オーソドックスの方は、「反改革」になる。

そのロジックは、「自分（オーソドックス）を壊してしまったら、元も子もない」である。

大学・大学院は、オーソドックスである。（企業大学が失敗するのは、大学がオーソドックスであることを知らないからである。）

国立大学の「法人化」では、大学が大学であるうとするときは、先ず「改革」が戦う相手になる：

「自分（オーソドックス）を壊してしまったら、元も子もない」

- 対 - 「死んでは本も子もないから、オーソドックスを変える」

大学院の定員割れに対し、「死んでは本も子もないから、オーソドックスを変える」は、つぎのようなことをやってくる：

入試成績優秀者報奨，授業料減額，無試験入学，受験料免除，
大学院の名称変更，コース再編

これに対し、「自分（オーソドックス）を壊してしまったら、元も子もない」の方は、どうやることになるか？

先ず、「状況」というもののとらえである。

現前は、複雑系の運動の一局面である。これは、複雑系の運動の中にある。

運動の最も基本的な要素は、＜時間＞である。

オーソドックスの立場は、つぎのようになる：

「オーソドックスは、この＜時間＞の中を、
自分を保って生きていく。」

どうして、生きられると思っているのか？

つぎのように思っているからである：

「オーソドックスのオーソドックスたる所以は、それが＜時間＞を通じて生きるものであるということ。——＜時間＞を通じて生きるものは、オーソドックスである。オーソドックスが、＜時間＞を通じて生きるものである。」

註：「改革」は、少し長い時間のことになると、思考停止する。

例えば「3次募集」では、「そのつぎ」が考えられていない。

オーソドックスの立場は、複雑系の運動を周期運動のようにとらえる。

「自分を保つ」を、「山あり谷あり」「冬来たりなば春遠からじ」で考える。

また、「改革」派が「窮地・困難」を否定的なものにして「脱出」「生き残り」を唱えるのに対し、オーソドックスの立場は、これを合理的で必要なプロセスと考え、肯定的に「棲む」「生きる」を行う場面と定める。

大学院の定員割れが本質的・構造的なものであるとき、それはわれわれに対するつぎのアナウンスである：

「時代は、大学院の規模を縮小する局面に入っているぞ！」

大学院のオーソドックス（質）を保つ方法は、規模（量）縮小である。

そして＜破格＞は、これの逆をやっていることになる。

2.1 大学院定員割れの〈理〉の理解

2.1.0 要旨

2.1.1 「大学院定員割れ」の問題構造

2.1.2 受験生減少は、〈惰性まかせ〉の現象

2.1.3 本質的な取り組みと回復には、時間がかかる

2.1.4 定員割れのと看、それは時代の流れ

2.1.0 要旨

作成：2009-02-11 更新：2009-02-11

事件に際して、最初に「危機脱出の方法」とひらめいたものに飛びつく行動が、パニック行動である。

これに対するのは、「この事件は何であるか？この本質的解決はなんであるか？」の考えのもとに行う行動——理を考え、これに基づこうとする行動である。

「大学院3次募集」は、パニック行動である。

実際、「大学院定員割れはどんな問題であるか？この本質的解決はなんであるか？」の論がこの中では出て来ない。

ここでは、「定員割れ」は考える対象ではなく、ひたすらこれから逃げるべきものである。

「大学院3次募集」のパニック行動を自ら鎮める方法は、その行動が「大学院定員割れはどんな問題であるか？この本質的解決はなんであるか？」の立論を欠落した体(てい)であるということに、自ら気づくことである。

大学院の定員割れが、需要に対する供給過多の問題であるならば、これに対する対応は「総体的な規模縮小」しかない。

本論考が問題にしようとするのは、そうでない場合である。

すなわち、大学院定員割れが、「大学院の意味・存在理由の不明が顕在化してきている現象」の場合である。

実際、意味・存在理由の不明な大学院に入ろうとする者はいない。翻って、「大学院は定員充足状態にある」については、つぎの2通りの解釈が立つ：

- 大学院の意味・存在理由が明らかである。
- 大学院の意味・存在理由が不明だが、それが顕在化していない。

意味・存在理由が不明の体(てい)で大学院が立つなどということは、あることなのか？——ある。
大学院は、国策として上から降りてきた。大学院は、大学にとってくを与えられたもの>である。意味づけは、大学の仕事になる。

註：国が「設置理由・理念」として文書にしたものは、設置されたモノの「意味」になるわけではない。

大学は、大学院の意味づけ・方法論の構築をやらねばならなくなったが、改めていま振り返って考えると、これをやっていない。すなわち、大学院が立ち上がったときの惰性にまかせる大学院運営をやってきている。この場合は、ポテンシャルが時間をおって低くなり、ついに定員割れの事態となる。

大学院の歴史のプロセスは、力学的な運動のプロセスである。そしてこれは、複雑系をなし、〈時代の流れ〉になる。よって、定員割れの事態への本質的な取り組みと大学院の規模の回復も、〈時代の流れ〉の内容になる。とくに、長い時間をかける歩みになる。(この歩みは、急げない。)

定員割れは、それが偶然的なものでないとするれば、構造的な問題である。そしてこのときは、「3次募集」は解決策にならない。逆に、「3次募集」は、定員割れが構造的な問題であることを隠蔽する。これに手を出す組織は、〈破格〉(禁じ手/邪道)で問題に応ずることをアタリマエにする組織になる(あるいは既にそうになっているから、3次募集に手を出す)。この組織は、モラル・ハザードをやっていることがわからない。

2.1.1 「大学院定員割れ」の問題構造

作成：2009-02-09 更新：2009-02-13

国立の教員養成系大学・学部の修士課程は、昭和63年の免許法改正を契機に、平成8年度までにすべての大学で設置されるに至った。

この大学院に入ろうとする者の目的は、つぎの2つである：

- 自己鍛錬
- 専修免許状の取得

大学院受験者数の推移は、〈この目的が魅力的に見えている者〉の数の推移である。（経済状況とか少子化は、いちおう考慮の外においてよい。）

一般に、大学院が立ち上がってしばらくは、大学院の内容が未知である分、夢が大きくもたれる。〈この目的が魅力的に見えている者〉の数が多。

大学院の内容がだんだん定まってくると、学問・研究の地味・たいへんがわかってくる。大学院の発行する〈資格〉が社会に出たときにそんなにもものを言うわけではないことも、わかってくる。大学院に対する見方が現実的になり、〈この目的が魅力的に見えている者〉の数は自ずと減少することになる。

この減少は、どこまでいくか？

下げ止まるようなカーブを描くのか？単純減少のラインを描くのか？下げ止まるにしても、それは定員割れのラインの上か下か？

大学院の実際をいろいろ観察する限りでは、答えは一様ではない。

国立の教員養成系大学・学部が立てた修士課程の場合はどうか？

定員がなかなか充足されない状態が続いてきた。一方、総体的に見た場合だが、横ばいに推移していて、単純減少のラインを描くようにはなっていない。しかし、2008年度に急落が起きた。（§1.1.1「大学院定員割れ」の実際）

国立の教員養成系大学院の「定員割れ」は、今後の傾向がいまのところまだはっきり見えない。しかし、大学院の存在理由が確かになっていない現状は、危うい。

いまは、「存在理由」という冷徹な問題の立て方をすることが、重要である。（現状は、これをやらないで、〈破格〉にとびつこうとする。）そしてこの場合、自分に都合よく考えてしまうことに抑制をかけるため、つぎの地点まで戻ってみるとよい：

国立の教員養成系大学・学部に修士課程があることは、昭和63年より前にはアタリマエのことではなかった。

実際、「国立の教員養成系大学・学部のいまの修士課程の存在理由」の論考は、簡単ではない。「破格」論を趣旨とする本論考は、これをパスする。すなわち、結局はつぎのようであろうと考えることにする：

大学院は、学生に良質な自己鍛錬を提供する。

そして、このことを知って大学院に入ろうとする者の数が、受験者数である。

大学側が受験者を呼び込む方法は、ただ一つ。良質な自己鍛錬を提供していることを知らせるのみ。

どのように？

ここを考えるとというわけである。

＜良質な自己鍛錬＞（中身）と関係ないもの（オマケ）を使って大学院を保とうとするのは、邪道を突く以前に、そもそも通用しない。しかも、＜良質な自己鍛錬＞の提供そのものを疑わせることになり、ひとを離れさせることになる。

2.1.2 受験生減少は、＜惰性まかせ＞の現象

作成：2009-02-10 更新：2009-02-13

プロジェクトは、立ち上げるより維持する方が難しい。

お定まりは：

華々しく立ち上げられ、
以後、惰性まかせとなり、
急速に萎んでいく。

教員養成系大学・学部の修士課程も、これに同じと考えるべきである。大学院を立ち上げてから以降、惰性にまかせる運営をしてきている。受験生を呼び込む＜魅力＞は立ち上げたときが最高で、以後自然減衰する。

運営が惰性まかせになる理由の第一は、運営の方法論が持たれていなかったということである。——ここで「持たれていない」とは、「持たれていない」という意識もないということ。

運営の方法論が持たれていないのに大学院を立てたということか？

然り。大学院は、国策として、上から降りてきた。

上から降りてくるものは、「本末転倒」の格好でスタートする。

そして、たいてい、だめになるまでこの格好が改まらない。

だめになってから、＜考える＞がスタートする。

教員養成系大学院はいま、これまでになかった何かが起こっている。

(§ 1.1.1 「大学院定員割れ」の実際)

ここは、大学院の意味を改めて考えるところである。それはすなわち、大学院運営の方法論がもたれていなかったことに気づいて、これの構築を開始すること。

しかし、何が起こり始めているかという点、〈破格〉の算段である。〈破格〉行動は、本来なすべきことを隠蔽する。だから、これを批判しなければならない。(本論考の趣旨)

2.1.3 本質的な取り組みと回復には、時間がかかる

作成：2009-02-10 更新：2009-02-10

大学院受験生の減少傾向に対し本質的な取り組みをする場合、これを開始してから回復基調にもっていくまでには、長い時間を要する。

大学院の〈上から与えられた〉という面をとらえれば、これは、「坂の上までリフトで持ち上げ、坂の下までころがしたものを、今度は人力で逆スロープを上まで上げる」という作業である。

いずれにしても、大学はこの作業をすることになる。なぜなら、これが、上から与えられた大学院が大学自身のものになることだからである。翻って、大学院発足以来のこれまでやってきた惰性のプロセスも、必然のプロセスと見ることができる。(大学が大学院を自分のものにする必須・必要なく成長〉プロセス。)

2.1.4 定員割れするとき、それは時代の流れ

作成：2009-02-05 更新：2009-02-13

大学院の定員割れが本質的・構造的なものであるとき、それは時代の流れになっている。（§ 3.1.2 「時代の波 / 流れ」の理解）

さらに、社会的需給の状態が変わらなくて大学院定員割れが起きているとき、それはつぎが内容になっている：

「大学院」幻想が壊れた

「大学院」幻想が飽きられた

（本論考が主題化する「定員割れ」は、この意味の「定員割れ」である。）

大学院には、「大学院」幻想をもった者が来る。

「大学院」幻想とは、

「大学院 = ほんとうに高度な学問が行われるところ」

である。——実際、つぎのような気持があるから、大学院に入ろうとする：

「大学院にいるのは特別な者であり、自分もその一人になりたい」

「自分もそのような者になれる」

逆に、つぎのように思われるようになったら、大学院に人は来なくなる：

「大学院は、〈ほんとうに高度な学問が行われるところ〉というのでは、どうもないらしい」

「〈高度な学問〉は、やる分にはずいぶんたいへんであり、そしてそんなにおもしろいものではないらしい」

「大学院に入ってよかったという話を、あまり聞いたことがない」

大学院にもライフサイクルがある：

1. 立ち上げのステージでは、ひとが勝手に「大学院」幻想を抱き、大学院に入りたいと思ってくれる。大学院受験にひとが多く集まり、合格倍率が高くなる。

2. つぎに、「大学院」幻想の減衰期が来る。

「大学院はそんな夢をもつようなところではない、甘いところではない」の事実がわかってくる、広く知られてくる。大学院を受験する者の数が減り、合格倍率が低くなる。

3. そして、「大学院」幻想の終焉期が来る。

大学院を受験する者の数が一気に減り、定員割れが常態になる。

4. つぎに世代的忘却期がくる。

「大学院」が、新鮮なことばになって再登場する。

（以下、これの繰り返し——ただし、状況がこの運動を許す限り）

註：ここで注意しなければならないのは、「大学院」幻想の減衰・終焉は、定員割れの十分条件だが必要条件ではないということ。現前の「定員割れ」をどうとらえるかは、たいてい、難しい問題である。

「大学院」幻想は、外からの作用（社会的なブーム）が特に起こらなければ、また、内からのアクションを特に起こさなければ、自然に減衰する。（§ 2.1.2 受験生減少は、〈惰性まかせ〉の現象）

一方、見当違いの作用・アクションを起こせば、かえって減衰を早める。

「大学院3次募集」は、この「見当違いのアクション」の一つである。

ちなみに、「教職大学院」は、立ち上げた時点で既に「教職大学院」幻

想が萎んでいる感がある。一般に、思惑先行でやってしまい理論構築を
なおざりにするとき、幻想の形成が起こらない。

2.2 ソリューション：状況への順応

2.2.0 要旨

2.2.1 この先の時間を展望

2.2.2 充実期間

2.2.3 「規模縮小」

2.2.4 大事を壊さない・絶やさない

2.2.0 要旨

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

大学院の定員割れが時代の流れであるとき、〈破格〉を策に用いることは大学をおかしくするだけである。では、どのように対応していくことがソリューションになるのか？

時代の流れを読んで、それに応じていくことである。

定員割れは、合理的なプロセスであるからこそ、現前している。

存在すれば運動の中にあり、運動は「山あり谷あり」であって「平ら」ではない。

定員割れは、大学に「いまは自分を見直すとき・充電／充実するときだ」とアナウンスしている。

大学院の受験者数の上下に一喜一憂するのではない。

ゆったりと上り下りする大学力の方に、意識を向けねばならない。

定員割れ対策は、大学力対策である。

大学力対策に〈破格〉を用いようとする者などいない。

定員割れに〈破格〉を用いようとするのも、したがって見当違いである。

2.2.1 この先の時間を展望

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

国立の教員養成系大学・学部の修士課程は、昭和63年の免許法改正を契機にして平成8年度までに、すべて設置されるに至った。

この修士課程が、構造的に定員割れを起こすようになったとする。その定員割れは、発足以来の大学院の歴史のいまとして捉えねばならない。定員割れに対策するとは、この歴史に対策するということである。

歴史が相手であるという意味で、「定員割れは時代の流れ」の言い回しを本論考は用いる。

20年前後の時間をかけて変化した構造は、もとの位相に回復するのに、相応の時間を要することになる。

それは短時間ではない。回復の内容が〈構造変化〉だからである。構造は徐々にしか変わっていかない。

2.2.2 充実期間

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

定員割れの時代は、大学が己に目を向け、充実を課す期間である。
まっとうなことにまっとうに取り組む。

これは、大学の力を制度・システムの話にして、競争主義・評価主義・短期成果主義（「中期計画・中期目標」）を唱えるところの、あの「大学改革」ではない。

あの「大学改革」は、ひとを「みてくれ」に走らせる。

ひとは「みてくれ」にすぐに飽きる。「みてくれ」をやる大学に幻滅する。

「まっとうなことにまっとうに取り組む」とは何か？
教育・研究をきちんとするということである。

「教育・研究をきちんとする」は、大学としてあたりまえ？

だったら、業績評価でインチキな点数稼ぎに教員を走らせようとするいまの「法人化」の国立大学は、大学ではない。

2.2.3 「規模縮小」

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

「質を保つために量を減じる」と「量を保つために質を落とす」
「さあ、どちらを取る？」と問われたら、ひとは、「質を保つために量を減じる」を取ると言う。

しかし、市場原理主義を雰囲気を感じると、「量を保つために質を落とす」をやってしまう。——「法人化」の国立大学は、これである。

「法人化」の国立大学は、大学院定員割れには＜破格＞で応じようとする。
＜破格＞を行うことで、大学院は自らを卑しくしていく。「量を保つために質を落とす」である。

正気は、《大学院定員割れには「質を保つために量を減じる」で応ずる》の方にある。

「定員割れの場合は、交付金の相応分を返納する」の規則に従えばよい。
（これで何が困る？）

大学院の「規模縮小」は、定員割れ対策としては意味がない。

数字の上で定員を減らすことも、実質的な意味はない。

規模縮小としてコース再編をやるのは、愚の骨頂、愚の極みである。
——こんな国立大学はある筈がないのだが、現実はありそうなのだから、
＜愚＞というものは底知れない。

2.2.4 大事を壊さない・絶やさない

作成：2009-02-06 更新：2009-02-13

大学院の定員割れが本質的・構造的なものであれば、それは底を打つまで進む。そしてつぎに、学生数を回復するステージになる。

ひとは、「不況に対しては、これから脱けることが当然」「定員割れに対しては、これから脱けることが当然」という考え方をする。

歴史的にいつの時からこのような考え方が一般的になったのかはわからないが、この考え方は騙されているのである。だれが騙しているというのではなく、互いに騙し合っている。

正しい見識は、つぎのものである：

災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。

死ぬる時節には死ぬがよく候。

是はこれ災難をのがるる妙法にて候。

(良寛)

このテキストは、つぎのように読む：

「災難は、災難ではない。」

ひとが「災難」と呼んでいるものは、実際には、事物のライフ・サイクルにおける合理的な——したがって、必要な——プロセスである。必要なプロセスならば、それは「災難」ではない。必要なプロセスとして、きちんと受けとめねばならない。

しかしひとは愚かなので、「災難」のときはバタバタしなければならないものだと思って、自分の根拠になっている大事を壊し始める。高揚して破壊する。(これを「パニック行動」という。)
「災難」はやがて過ぎるが、そのときには自分の根拠がなくなっている——自分で壊してしまったからだ。

こういうわけで、「災難」の時節には、
<大事を壊さない・絶やさない>を努めて行うことが重要になる。

大学院定員割れの状況では、「バタバタしなければならない」と思う手合いが、いろいろバタバタをやり出す。

長く続くわけのない(冷静に戻ったときに恥じ入るような)新しがりの名称に変えたり、定員割れを糊塗するような再編をやり出したりする。そしてこの度は、3次募集に手を出した。

「3次募集」の含意は、3次募集一つではない。大学の破壊もこの中に入ってくる。(§3.2「3次募集」(<破格>)は大学破壊)

そこで、つぎの結論になる：

「<大事を壊さない・絶やさない>を努めて行う」の一つとして、
「3次募集」を退けるということを、やらねばならない。

3. 「3次募集」(＜破格＞)は 成り立たない

3.0 要旨

3.1 「3次募集」(＜破格＞)にひとは集まらない

3.2 「3次募集」(＜破格＞)は大学破壊

3.0 要旨

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

時代の流れに無理に抗う行為が、破格である。

特に、破格は成り立たない行為である。

——成り立たないばかりでなく、自分自身を壊す。

「3次募集」は、破格行動である。

3次募集は、行うことがよいことのように思われている。

反対があっても、それは負担やスケジュール上の問題を理由にしたものである。負担やスケジュールの問題がクリアされれば、反対する理由はなくなってしまう。

「3次募集」をやりたいと思う者・やろうとする者の考え方は、一様ではない。立場によっても考え方に違いが出てくる。——例えば：

	＜3次募集＝破格＞の認識	
	A. ない	B. ある
1. 「2次募集で定員に至っていないなら、つぎに3次募集をするのは当然。」	無邪気	「学生獲得がすべてに優先!」
2. 「3次募集は、やる/やっているポーズを見せる必要がある。」	無邪気 横並び	確信犯的 横並び

3次募集は、つぎの2つの意味で成り立たない：

(1) 3次募集にひとは集まらない。

(2) 3次募集は、大学破壊である。

したがって、3次募集を退ける論には、つぎの2タイプがある：

(1) 「3次募集にひとは集まらない」を示す。

(2) 「3次募集は、大学破壊である」を示す。

(1) は、上の表の2の行のタイプには、効かない。このタイプには(2)を用いることになるが、「自分が許している程度を越える破壊である」ということを知らせるものにならねば、効果はない。(§3.2 「3次募集」(＜破格＞)は大学破壊)

3.1「3次募集」(＜破格＞)にひとは集まらない

3.1.0 要旨

3.1.1 複雑が見えないので、破格をやる

3.1.2「時代の波 / 流れ」の理解

3.1.3 波・周期運動

3.1.4「抵抗・順応」の考え方

3.1.5 3次募集にひとは集まらない

3.1.0 要旨

作成：2009-02-11 更新：2009-02-11

3次募集を指示する意見の一つのタイプが、「2次募集で定員に至っていないなら、つぎに3次募集をするのは当然。」である。「3次募集で学生が得られるかも知れない。」というわけである。

3次募集を「破格」の理由で退ける論は、このタイプの意見に対しては、つぎのように言うことになる：

3次募集(＜破格＞)にひとは集まらない。

受験者が集まらないのは構造的な問題であって、募集の回数が解決する問題ではない。

3.1.1 複雑が見えないので、破格をやる

作成：2009-02-06 更新：2009-02-06

ひとは、ものごとを複雑系として見るができない。

「〇〇を実現する行動」を想うときは、

「この結果は、〇〇を実現できた・できなかったのどちらか」

にしてしまっている。すなわち、

「同時にいろいろなことが起こってしまう」

という考えをもてない。

そこで、「〇〇を実現する行動」をやれば、起こることがみな「想定外」になり、失敗する。そしてもとに戻る。あるいは、既に本も子も無くしている。

「大学院3次募集」でやっていることは、まさにこれである。

「この結果は、学生の獲得に成功・不成功のどちらか」のアタマになっている。「同時にいろいろなことが起こってしまう」の考えがない。

翻って、「破格」が認識されるのは、対象を複雑系として認識するようになるときである：

「これをすれば、とんでもないことが同時にいろいろ起こってしまう。だからこれは禁じ手/破格というふうになっているのだ。」

3.1.2 「時代の波 / 流れ」の理解

作成：2009-02-06 更新：2009-02-06

現前は、「時代の波 / 流れ」というコンテクストを伴う。

「時代の波 / 流れ」は、複雑系である。（「複雑系」のことばは、<ひとが科学できないもの>を指すのに使われる。）

大学院が定員割れになるとき、それは時代の波 / 流れの中にある。 — 一定員割れを時代の波 / 流れの中において考えることが、定員割れの<理>を考えるということである。（§ 2.1.4 定員割れのと看、それは時代の流れ）

「時代の波 / 流れ」を概念にもつとき、大学院定員割れの問題に<破格>で対応するという考えは出て来ない。特に、「大学院3次募集」は出て来ない。

3.1.3 波・周期運動

作成: 2009-02-10 更新: 2009-02-10

ひとは、最初に出会う物事を、絶対的・画期的なものに思う。

そして、過剰な反応をする。

過剰な反応をして失敗する。

ながい時を経て、再びこれに出会う。

そこで、<繰り返し>——「波」「山あり谷あり」——というものを知る。

繰り返すことを知ったので、今度はこれに過剰な反応をすることはない。

さらに進んで、山にいるときはつぎにやってくる谷を思い、谷にいるときはつぎにやってくる山を思うようになる。山にいるからどうだ、谷にいるからどうだ、ということがない。

これを、「余裕」とか「達観」と謂う。

<繰り返し>を知るとき、正道・邪道を併せて知る。

すなわち、「邪道は続かない・正道が結局勝る」を知る。

ここに、大学院定員割れが現前になっている。

<繰り返し>を知らなければ、これに過剰に反応し、破格を用いようとする。知っていれば、このときの正道は何かと考える。

3.1.4 「抵抗・順応」の考え方

作成: 2009-02-05 更新: 2009-02-05

ひとは、「前向き・後ろ向き」のことばを自分に都合よく使う。

「改革」バブル期には、「前向き」は「改革」と同じ意味になる。

企業経営では、「破格」をやる者が前向きで、そうでない者が「後ろ向き」ということになる。国立大学の「法人化」では、「法人化」路線を進める大学執行部が「前向き」、これに批判的な者が「後ろ向き」。「大学院3次募集」では、これを唱える大学執行部が「前向き」、これに批判的な者が「後ろ向き」。

「前向き・後ろ向き」のことばのこのような使われ方がナンセンスであることは、だれでも感じる。では、そのナンセンスをどのように述べたらよいか？

「ひとによって、目の前に見えているものが違う」と述べればよい。

(さらに言えば、「同じ人間でも、状況によって見え方が違ってくる」。)

現前の背後には、時代の波 / 流れがある。

状況認識では、この時代の波 / 流れをとらえることが肝要となる。

自分に押し寄せてくる波の高さ・速さに応じて、自分のこれまでの立ち位置を保とうとするか・逃げようとするか・その波に流されるままになるうとするか、異なる判断がされる。

ここに、AとBの二人がいる。Aの目には、数十センチメートルの高さの波がやってくるのが見える。Aは「このやり方で波に対抗できる！」

と思う。Aは、抵抗を選んだ自分を「前向き」、抵抗しようとしないうる向き」と定める。

Bの目には、数メートルの高さの波が押し寄せてくるのが見える。そこで、「ここは波に流されるしかない場面だ」と思う。Bにとって、Aは不思議なことをやる人間である。

時代の流れがどのように見えるかは、経験値の高さや思考の深さによって違ってくる。そして、経験値の高さ・思考の深さがいちばん効いてくるのは、時間軸の使用である。

すなわち、経験値が低く思考の浅い者は、時間軸が視座に無いので、ものごとを見る・考えるが<目先・一瞬>のことになる。<全景・長いスパン>を見る・考えるができない。

「抵抗・順応」の対象と定めるもの、そして「抵抗・順応」の方法は、見ているのが<目先・一瞬>か<全景・長いスパン>かで大きく違ってくる。

例えば、経済活動に「エコ」をかぶせることがここしばらくの流行りであるが、このときの「エコ」は、<全景・長いスパン>を方法論として提起していることになる。

「教育は百年の計」のことばで提起しているものも、同じである。

そして「教育は百年の計」をことさら言わねばならないのは、ひとはすくなく<目先・一瞬>をやってしまうからである。

実際、「大学院3次募集」は、「<目先・一瞬>をやってしまう」の典型的な例になるものである。

3.1.5 3次募集にひとは集まらない

作成：2009-02-08 更新：2009-02-11

2月の2次入学試験に続いて、3月に3次入学試験を行う。

この1か月の間に、状況は大学院にとってどんなふう「好転」しているか？3次募集を行おうとする者は、もしかして、この「好転」を見ているのかも知れない。

そこで、「この間の状況の変化は何か？」と考えてみよう。

ここに、就職浪人が最終的に確定している、ということがある。

そこで、いちおう、彼らの応募の期待値は？と考えてみる。

この場合は、「大学院にでも入るか・大学院に入るしかないか」になる。「でも・しか」院生である。(このあり方も問題になるが、いまは問わない。)民間企業就職だと就職浪人の形の卒業は不利になるので、「空白をつくらないために、大学院に入っておこうか」があり得る。しかし、教員養成系大学・学部の学生の場合、就職浪人の形は教職浪人であり、このような形で卒業することは不利にはならない。

これの他には、「就職浪人」が「状況好転」の内容となる要素は考えられない。

実際、3次募集で2次と3次の間に状況の「好転」を見ているという気配も、感じられない。

さて、「好転」の要素がなければ、「3次募集にひとは集まらない」になる。これが論理的なものの考え方である。

このロジックに対して「やってみなければわからない」を言うのは、根性主義であって、組織はこれに付き合ってはならない。組織が論理的なものの考えから逸脱するのは、それ自体がモラル・ハザードである。

「やってみなければわからない」でやってしまうものは、間違いなく「不良債権」(国立大学の場合は、税金の無駄遣い)になる。「サテライト」や「大学基金」はそうであり、いまは「教職大学院」がこれになりそうな感がある。(「3次募集」も、教職大学院が先鞭をつけた。)

3.2 「3次募集」 (<破格>) は大学破壊

3.2.0 要旨

3.2.1 自ら大学院を貶める

3.2.2 大学が<破格>常習組織に (モラル・ハザード)

3.2.3 集団行動主義 (知的退行)

3.2.0 要旨

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

ひとは、自組織の窮地を救うつもりで破格行動に手を出す。
この破格行動は、つもりとは逆に、自組織を破壊するものになる。
この「破壊」は、つぎの2つを内容にする：

1. 組織の<大事>を破壊しつつ、組織をおかしな方向に進ませる。
2. <破格>行動を「正しい行動」にするモラル・ハザード

註：組織犯罪は、だいたいがこのような構造になっている。

外に出たら「不正」になることが、内では正しいこととして行われる。そして、この「正しい行動」が、やがて「不正」として摘発される。

組織犯罪で犯罪意識が希薄なのは、構造的な理由がある。

3次募集は、破格行動である。

「さらにもう1回」に一旦手を出してしまうと、以降「年3回」がベースになる。

「年3回」は、「大学院の定員割れ」に対して効果がない。

3次募集のつぎにすることは？

つぎの年度には、破格の度をさらに増した新しい破格を考え出さねばならなくなる。

程度問題として、「3次募集」のつぎに「4次募集」をもってくることはできない。「いつでも受験できる」があり得る形か？ しかしこれは無

理。

といったぐあいに、<破格>のネタはすぐに尽きる。

- ・ よって、「前年並み / 従来並み」の作為に最初に手をつける者は、<ババを後任に送る者>である。後任者は、「ババを引かされた者」である。
- ・ 「前年並み / 従来並み」の作為は、続かない。
実際、もし続けられるとしたら、「大学院の定員割れ」はもともと時代の流れというものではなかったのである。（§ 2.1.4 定員割れするとき、それは時代の流れ）

しかし、一旦破格に手をつけた者は、破格でなんとかしようと思うカラダになる。

破格のネタはすぐに尽きる。

それでも無理に破格を考え出す。それは酷さを増したものになる。

そして、やってしまった破格は、大学に制度として残る。

破格をやる大学は、破格をやることで自分をひどく壊す。

破格は、報いとなって自分に返ってくる、自分の首を絞めることにしかない、自分の身を滅ぼす。

破格による大学破壊の内容は、つぎのものである：

1. 大学の<大事>を破壊しつつ、大学をおかしな方向に進ませる。
2. 破格行動を「正しい行動」にするモラル・ハザード

<かりそめ>のために破格をやって、<大事>を壊す。
「法人化」の国立大学の十八番 (おはこ) になった本末転倒である。

3.2.1 自ら大学院を貶める

作成：2009-02-08 更新：2009-02-08

破格に手を出す者は、周囲から軽んじられる / 軽蔑される。
行う方も、自らを卑しくしていく。

「武士は食わねど高楊枝」のことばがあるが、この意味はつぎの通り：

<食う>ために<破格>をやれば、<武士>ではいられなくなる。
<武士>でいるためには、<食う>ためとはいえ<破格>をやっ
てはならない。
<食う>ための<破格>をやるときは、<武士>を止めるときで
ある。

「鳩を飲みて渴を止む」というのもある。

「大学院が続くために何が必要か？」の思想を持たない者が、3次募集
に手を出す。「やむをえない」くらいのことばで自足して、「鳩を飲みて
渴を止む」をやる。

3次募集とは、どのくらいの「鳩」か？
大学院の3次募集を見た者が最初に想うことを、考えてみるとよい。
最初に想うことは、「この大学院はどうなっているのか？」である：

「入る人間がいないのだなあ。」
「入っても周りは少しか。——最悪自分ひとりだったりして。」
「随分台所事情がひどいんだろう。」
「形振り構わずといったところだな。」

「実際、 <もう終わってる>という感じかな？」

「やる方も士気が上がらんだろう。」

「どうも、入ってもしょうがないみたいだ。」

3.2.2 大学が<破格>常習組織に (モラル・ハザード)

作成：2009-02-08 更新：2009-02-08

<破格>は、一度手をつければ、常習癖になる。

大学院に定員割れが起こるとき、それは時代の大きな流れ (複雑系) の中にある。3次募集は、これを解決するものにならないのはもちろん、絆創膏ほどの処方にもならない。

3次募集に手を染めた者が、これがうまくいかないのを見てつぎにやることは、新たなく破格>の案出である。

これには、つぎのようなものがあり得る、あるいは実際にある：

- 「入学試験成績優秀者」を定めて、授業料の免除や減額を措置する。
「成績優秀者」 作為の学内モラル・ハザードへ。
- 授業料減額
同種大学院の格安横並び、あるいは格安競争のチキンレース模様へ。
- 事実上の、無試験入学
- 受験料免除
受験生を誘い込み、そのまま入学へ (入試の有名無実化とペア)。

この2つは、「だれでも入れる大学院は、社会が修了者を評価しない」という意味で、大学院の自殺行為になる。

- 大学院の名称をキャッチーなものに変更
早晚、この名称を恥じることになる。

(教員養成系の大学院なら、「教育学研究科」の名称を保つのがよい。)

○ 定員割れが目立たない形にコース再編,

早晩, 軽率であったと後悔することになる。

(教員養成系の大学院なら, 教科ごとに専修を立てる形を保つのがよい。)

3.2.3 集団行動主義 (知的退行)

作成: 2009-02-08 更新: 2009-02-08

破格は, まさにこれが成り立たないことによって, 「窮状に際して団結して立ち上がる善き者」と「一緒に行動しようとしぬ卑怯者」をつくる。(§ 4.3.3 「卑怯者にされたくない」の心理)

この知的退行も, 「破格の組織破壊」の一つである。

4. 「3次募集」の組織心理・知力

4.0 要旨

4.1 3次募集を納得 / 説得することは

4.2 「3次募集」を考え出す知力の要素

4.3 <破格>行動を支える組織の力学

4.0 要旨

作成：2009-02-13 更新：2009-02-13

大学執行部は、「定員割れ」対策として「3次募集」を決め、これをトップダウンしてくる。

3次募集は破格行動である。

大学執行部がこれを択ぶのは、役割行動みたいなもので、しょうがない面もある。そこで、これが実施されるかどうかは、下の者の対応にかかってくる。

下の者は、だいたい3次募集に応じる。

ここには、組織の集団心理・知力のダイナミズムが働いている。

4.1 3次募集を納得 / 説得することば

4.1.0 要旨

4.1.1 「交付金を返納しなければならない」

4.1.2 「定員未充足なのだから、やむをえない」

4.1.3 「定員割れの大学院は、潰しに遭う」

4.1.0 要旨

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

3次募集を、組織はすんなり受け入れる。

ひとは、3次募集を単純・素朴に納得する。

すなわち、単純・素朴なことばで納得する。

そして、このことばが、同時に、説得のことばになる。

つぎが、このことばである：

「定員未充足なのだから、やむをえない(やるのが当然)」

「定員割れの大学院は、潰しに遭う」

註：単純・素朴であることは、納得 / 説得のことばの一般的条件である。

4.1.1 「交付金を返納しなければならない」

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

大学執行部が「3次募集」の実施を説得する場合、その率直なことばはつぎのものである：

「交付金を返納しなければならない。

——中期目標・計画の該当部分の<失敗>ということになる。」

ひとの価値判断、優先度の考え方は、その者が就いている役職や立場によって、とんでもなく違って来る。

大学執行部は、「大学評価」を重要なものにする。

教員一般は、大学の実質を重要なものにする。

4.1.2 「定員未充足なのだから、やむをえない」

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

3次募集は、「定員未充足なのだから、やむをえない(やるのが当然)」のことばで、単純・素朴に納得される。

「定員未充足なのだから、やむをえない(やるのが当然)」は、「定員充足は自分の務め」に言い換えられる。

このことばは、「定員充足は無条件に自分の務め」になる。

すなわち、「定員充足行動はどんな条件において自分の務めであるか？」という<条件>の問題が、思考停止される。そしてこの思考停止が、自分で意識されない。

思考停止・無意識の相が、「単純・素朴」である。

<定員充足行動が自分の務めになる条件>の思考停止・無意識が、単純・素朴に「定員未充足なのだから、やむをえない(やるのが当然)」を言わせている。

「〇〇はどんな条件において自分の務めであるか？」が自問されないと、どんなことになるか？

<務め>の独走になる。

<務め>の独走は、そのまま組織破壊である。

(「兵隊」とか「役人」を例に考えてみるとよい。)

4.1.3 「定員割れの大学院は、潰しに遭う」

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

3次募集は、「定員割れの大学院は潰しに遭う」のことばで、単純・素朴に納得される。

問題：この考え方の誤りは、何か？

答え：大学を私物化している。

公立の機関に棲む人間は、存外、自組織の私物化について鈍感である。自組織を整理されないための実績粉飾が、当然のように行われる。

大学院の定員割れが起こるとき、それは「大学院のこれまでの形態は保てない」を示している。

保てないものを無理に保とうとするのは、粉飾であり、私物化である。ところが、粉飾・私物化が思考停止される。そしてこの思考停止が、自分で意識されない。

思考停止・無意識の相が、「単純・素朴」である。

粉飾・私物化の思考停止・無意識が、単純・素朴に「定員割れを理由に大学院がつぶされることのないよう、3次募集の実施を！」を言わせている。

大学院3次募集は「保てないものを無理に保とうとする」であるが、ここで難儀なのが、いまの「法人化」の国立大学には「改革」のアタマしかないということである。

すなわち、今日「改革」は、「保てないものを無理に保とうとする」とイコールである。ひとつの「無理に保とうとする」を退けることは、別の「無理に保とうとする」を持ち上げることにしかならない。

実際「大学院をつぶされる」を言っているのも、「改革」を自任する者たちなのである。（「改革」派は、危機感を強調する者たちである。）

4.2 「3次募集」を考え出す知力の要素

4.2.0 要旨

4.2.1 <複雑系>の視点の欠如

4.2.2 <時間>の視点の欠如

4.2.3 <歴史>の視点の欠如

4.2.4 <国立>の視点の欠如

4.2.5 実効性については、思考停止

4.2.6 横並び志向

4.2.0 要旨

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

大局的な見方を欠くと、間違っただけをやってしまう。

「3次募集」は、大局的な見方を欠くところから出てくる——大局的に物事を考えるとところからは、「3次募集」のようなものは出て来ない。

そこで、大局的な見方・考え方というものを、ここで簡単に押さえておくことにする。

この作業を馬鹿にしてはならない。

ひとはいつも、いまの自分を賢さのピークにいるとってしまう。

小学生も、自分をいっばしの者だと思っている。

自分をいっばしの者と思っている大学教員も、この小学生と変わらない。

「大局的」とは、現前 (presence) を延長する考え方である。

いたって単純な方法論だが、効果は絶大である。

ものごとは、僅かな延長で、様相が一変する。

これは、＜延長＞が、現前を＜相対化＞する方法になるということである。

簡単な例

目の高さをつぎのように変化させる——風景は激変する：

蟻の目の高さ、子どもの目の高さ、自分の目の高さ、建物の2階、デパートのビルの屋上、高層ビルの展望ラウンジ、飛行機、宇宙ステーション。

ちなみに、学校教育は、教科が分担し合って、「延長・相対化」を教えていることになる。——「延長・相対化」の内容が、教科（歴史、地理、生物、思想・哲学、……）によって違ってくる。

よって、教員養成系大学・学部の教員は、「学校教育」を守備領域にする者として、本来なら、大局的な見方・考え方が身に付いていなければならない。

しかし、現実にはこうはならない。

カラダとは不自由なものであり、騙されやすい。

4.2.1 <複雑系>の視点の欠如

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

現前は、複雑系である。

これに作用すれば、いろいろなものが返ってくる。

<思惑>でやったことには、<想定外>が返ってくる。

ひとは、ものごとを、自分と等身大に見てしまう。

自分が「○○する」ことは、対象が「○○になる」ことだと思ふ。

特に、自分が実施しようとする「3次募集」は3次募集であると思ふ。

——この含意に考えが及ばない。

4.2.2 <時間>の視点の欠如

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

「3次募集」を言うときのアタマにあるのは、<いま>である。

「時間を前後に延長したとき、<いま>がどう見えてくるか？」という考え方をしない。

ひとはいつも、<いま>を決定的なものに見てしまう。

「バスに乗り遅れるな」「機会損失をするな」「いまこれをしないと破滅する」の心理状態になる。

事実是这样である：決定的なくいま>などというものは、ない。

ちなみに、「塞翁が馬」は、これを教えるテキストである。

4.2.3 <歴史>の視点の欠如

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

この大学は、歴史があつての「この大学」である。

この大学は、歴史の上にある。

この大学の歴史は、この大学の創設の日に始まったのではない。

国立大学の歴史というものがあり、その前にも「大学の歴史」というものはある。

たとえば、昔の仏教寺院は、いまの大学である。

大学の歴史を溯っていけば、それは人類の知の歴史の中に溶けて、境界のわからないものになる。

いまここに、大学を変えようとする者がいる。

われわれは考える：「その知はどの程度のものか？」

——小学生も、自分をいっばしの者と考える。

<知>については、進歩史観は成り立たない。

いまの大学人は、余計なことでバタバタさせられる。

<大事>は緊急の相で現れるものではないので、後に回される。

つまらないものが緊急の相で現れて、これに時間を費やされる。

おそらく、いまの大学人の知は、昔の大学人の知よりも劣っている。

大人と小学生くらいの差があると見ておいた方がよい。

小学生も、自分をいっばしの者と考える。

いまの大学人は、自分を信用してはならない。

大学をいじろうとするときは、自分のやろうとしていることが大学の歴史の中にきっちり位置づくかどうか確かめる作業から入るべし。

4.2.4 <国立>の視点の欠如

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

国立大学は、国立である。

国立とは、"of/by/for the people" のことである。

ひとは、「税金の無駄遣い」や「既得権益を手放さない」を他人がやる分には「けしからん」と言うが、自分ではそれと同じことをやる。

国立大学も、これと変わるものではない。

問題：大学院定員割れの事態に対する大学の行動として適切なものは、つぎのどれか？

1. 交付金のうち定員未充足分相当額を、国庫に返納。
2. 「入試成績優秀者＝授業料免除者」を作為する。
3. 3次募集。

.....

4.2.5 実効性については、思考停止

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

「改革」の時代は、「やってみなけりゃわからない」が「前向き」の意味になる。

「走りながら考える」がよい意味のことばになると、同類。

「しっかり考えずにやろうとするな」「計算・理が立たないからやめよう」を言うことは、「後ろ向き」になる。

「3次募集」は、実効性については思考停止した貌で、そのまま打ち出される。

「3次募集」は、「前向き」である。

4.2.6 横並び志向

作成：2009-02-12 更新：2009-02-12

やる者が多くなると、そのやっていることはよい事になる。

逆に、それをやらないのは不真面目ということになる。

「法人化」の国立大学では、「大学院3次募集」がこのようなものになる気配がある。

4.3 <破格>行動を支える組織の力学

4.3.0 要旨

4.3.1 稚拙な物言いが「意見・議論」の意味に

4.3.2 異論をつくる手間より、従う手間を払ふ

4.3.3 「卑怯者にされたくない」の心理

4.3.0 要旨

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

トップ・ダウン体制であっても、組織挙げての<破格>行動は、この実行部隊になる下の者が支えることをしなければ、実現するものではない。

トップには、<破格>に手をつける理由がある。

立場がそうさせるのである。

しかし、下の者には、これに付き合わねばならない理由はない。

では、どういう力学があって、下の者も<破格>行動へと自ら進むようになるのか？

以下がこの力学である：

- ・トップ・ダウンに対抗するものは「意見・議論」であるが、これが既に機能しなくなっている。

トップ・ダウン体制での組織では、「意見・議論」が雑になることと機能しなくなることの悪循環が起こっている。

- ・異論をつくる手間より、従う手間の方を択ぶ。

集団と一緒に行動をとらない者は、一緒に行動しない理由を明らかにすることを、有形無形に求められてくる。理由を述べる論の作成が課されるわけである。一方、一緒に行動をとる側にいけば、この作業は無用になる。

- ・「卑怯者にされたくない」の心理

組織では、<多勢に無勢>の格好になった者は、自分が卑怯者

にされていると思うようになる。卑怯者にされたくないで、多勢の方に回る。

4.3.1 稚拙な物言いが「意見・議論」の意味に

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

トップ・ダウン体制では、トップ・ダウンの常態化と意見・議論の劣化が、悪循環的に進行する。

すなわち、トップ・ダウン体制では、ひとは意見・議論の無力を思い知らされる。

無力なものになった意見・議論をていねいに行おうとする者はいないので、意見・議論は雑なものになる。

雑な意見・議論が相手なら、提案（指示）のトップ・ダウンも雑で済む。これはトップ・ダウン体制の強化ということになる。

以下、この悪循環。

この悪循環で、意見・議論をきちんと行う能力、提案をきちんと行う能力も、失われていく。そして、このことが意識されない。

今日、大学のインテリジェンスの低下が言われているが、実は「意見・議論をきちんと行う」「提案をきちんと行う」ができなくなっているところ、この問題の核心を見なければならぬのである。

4.3.2 異論をつくる手間より、従う手間を択ぶ

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

集団と一緒に行動をとらない者は、一緒に行動しない理由を明らかにすることを、有形無形に求められてくる。理由を述べる論の作成が課される。

一方、一緒に行動をとる側にいけば、この作業は無用になる。

論の作成作業は手間がかかる。そこで、この手間をかけている余裕がないときは、一緒に行動をとる側に回ることになる。

実際、本論者は、大学院3次募集をよしとしない立場を理由づける作業であるが、3次募集を容認する側に回れば、この手間のかかる作業は無用になる。

ちなみに、以下の論考も、「一緒に行動しない理由を述べる論」として嘗てつくられたものである：

- ・『シラバス検閲』
- ・『「大学基金」異論』

4.3.3 「卑怯者にされたくない」の心理

作成：2009-02-07 更新：2009-02-07

トップ・ダウンで降りてきた施策にみながすんなり従うのには、「卑怯者にされたくない」の心理も関係している。

「卑怯者」とは、集団と同じ行動をとらない者のことである。——「卑怯者」は、人格を指すことばではない。

実際、集団いじめでは、いじめをする集団が「卑怯者」になるのではなく、一緒にいじめをやらない者が「卑怯者」になる。

組織では、＜多勢に無勢＞の格好になった者は、自分が卑怯者にされていると思うようになる。卑怯者にされたくないので、多勢の方に回る。このメカニズムにより、絶対多数のとする行動が「正しい行動」の意味になる。そして、これを行わない者が「卑怯者」になる。

実際、「3次募集」では、(これまでの「法人化」施策の場合と同様、)

「たとえダメとわかってても／ヘンと思っても、
行動を起こすのが務め。」

が組織の雰囲気になる。これは「集団玉砕」の精神構造である。そして、「玉砕」に加わらない者は「卑怯者」である。

5 おわりに

作成：2009-02-14 更新：2009-02-14

「大学院3次募集」がトップダウンされてきた。

意見を求められてその場で意見をつくれないう器用な者は、その場を退いたところで、アタマに浮かぶことを書いてみて、その書き上がってきたものの中に自分の意見を見出す。

この度は、随分急いだが、自分の意見を見出すのに十と一日がかかった。翻って、本論考は11日のやっつけ仕事である。

この後、どう考えが変わるかわからない。

考えが変わる都度、内容を更新していくつもりである。

本論考は、トップダウンの3次募集を退ける論になっている。

あるいは、3次募集をやるのが正義みたいになっている組織の中で、「ほんとにそうか？」とたてつく『異論』の趣きになっている。

このような論考を、短時間につくって、人の目に触れるようにするというのは、少し前まではあり得ないことであった。

これをできるようにしたのが、「情報化」である。

論考の最後で話が脱線する形になるが、以下このことに少し触れて、「おわりに」とする。

情報化社会では、だれもが「失敗する者」として自分を曝すことになる。

トップも、「失敗する者」として曝される。

これはトップの不幸ではない。

トップの不幸は、無謬性を負わされることの方にある。

無謬性を負わされたトップは、失敗が見えない組織をつくる。

トップダウンの通路だけにして横を分断する構造の組織——中央集権——である。

この組織のトップは、不幸せな者になる。

情報化社会は、中央集権を不可能にする。トップの無謬性を不可能にする。

この社会では、＜権威＞の意味も変わる。

＜権威＞は＜失敗＞と compatible な概念になる。

宮下英明 (みやした ひであき)

1949年、北海道生まれ。東京教育大学理学部数学科卒業。筑波大学博士課程数学研究科単位取得満期退学。理学修士。金沢大学教育学部助教授を経て、現在、北海道教育大学教育学部教授。数学教育が専門。

「3次募集」異論 —— 「破格」論

2009年02月15日 初版アップロード

註：本論考は、つぎのサイトで継続される（この進行に応じて本書を適宜更新する）：

http://justice.iwa.hokkyodai.ac.jp/workshop/miyasita/additional_recruitment/

<http://m.iwa.hokkyodai.ac.jp/m@iwa.hokkyodai.ac.jp>

